

小川未明文学館 館報

第四号

小川未明文学館

vol.4

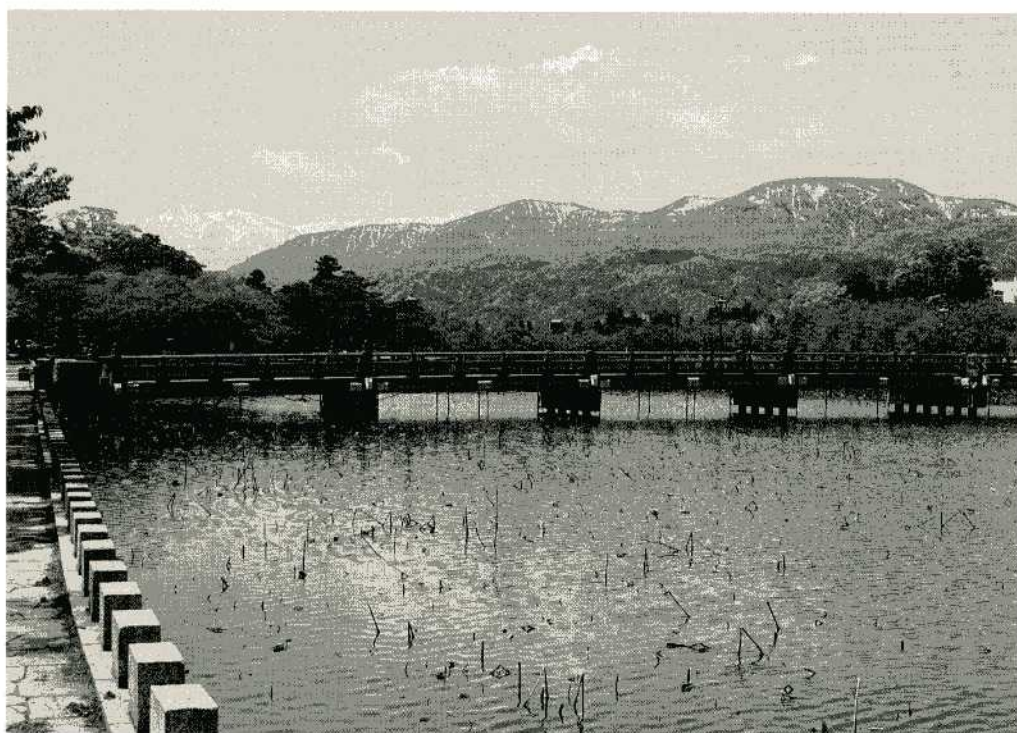
6

小川未明文学館

新潟県上越市本城町八一三〇（高田図書館内）

TEL 025152311083

FAX 025152311086



高田公園西堀より南葉山を望む

未明が6年間通った高田中学は、西堀のすぐ隣にありました。雪深い冬季は春日山から通うことが難しく、堀端の中々殿町にあった漢学教師江坂香堂宅などに下宿して通学しました。若き未明は南葉山を、また晴れた日には妙高山を仰ぎ見て、どのような想いをめぐらせたのでしょうか。

小川未明文学館 館報 第四号

二〇一〇年五月三十一日発行（年刊）

目次

【寄稿】

小笠裕二「童話集『金の輪』とその周辺」 2

【報告】

文学館一年の記録（平成二十一年度） 6

平成二十一年度特別展（報告）

「つながるいのち——『金の輪』・

『ものぐさじじいの来世』絵本原画展」

文学館講座「未明童話『金の輪』の世界」 10

【小川未明文学賞】

13

【ボランティアネットワークだより】

「のばらvol.6」

【文学館からのお知らせ】

16 14

童話集『金の輪』とその周辺

小埜 裕二

(上越教育大学教授)

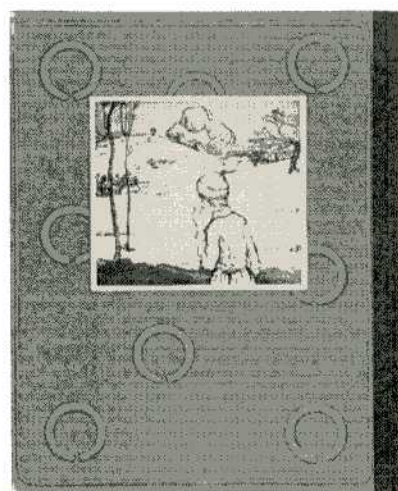


小川未明の『金の輪』は、大正八年一二月に南北社から刊行された。廣島新太郎の装幀で、本文二二四頁、未明自身による序文の後、童話と詩をとりあわせた、全二五作品の童話集である。信念に貫かれた序文、各作品の内容、童話集の構成、活字の色使い、アンカット版の装丁等を見ると、この童話集が決して安易に計画された出版でないことがわかる。

一、

『金の輪』は未明の三冊目の童話集である。最初の童話集『赤い船』(明43・12)刊行後、しばらく未明は童話の創作から離れるが、大正三年頃から再び童話の筆をとり、大正七年に二冊目の童話集『星の世界から』(大7・12)を刊行する。『金の輪』はその一年後に出版された。『金の輪』刊行後、未明は『赤い蠟燭と人魚』(大10・4)、『港に着いた黒んぼ』(大10・11)、『小さな草と太陽』(大正11・9)、『気まぐれの人形師』(大12・3)等の童話集を矢継ぎ早に刊行し、大正期の未明童話の位置を確固たるものにしていく。

『金の輪』刊行時、未明は三七歳であった。大正八年三月、青鳥会を母胎とする雑誌『黒煙』を創刊、四月からは児童雑誌『おとぎの世界』の主宰を務めた。大正七年に創刊された鈴木三重吉による『赤い鳥』の成功を受け、児童雑誌の創刊が相次ぎ、芸術性の高い、いわゆる童心主義童話が大正期の自由な風潮のなかで隆盛をみる。



『金の輪』

1919年12月 南北社

未明がその流れの先頭の一人に立ったのが『金の輪』であった。未明は、大正三年に長男哲文を亡くし、大正七年に長女晴代を亡くしている。亡児の命をかわりに生きるかのような盛んな仕事ぶりであった。

『金の輪』所収の童話二五編の初出誌は、未明が主宰を務めた「おとぎの世界」が一三作品と半数以上を占める（「おとぎの世界」各号に未明は童話と詩を両方載せることが多かった）。「おとぎの世界」の次に掲載数が多いのが「読売新聞」の六編である¹。その他の掲載誌は「黒煙」が一編、「少年世界」が一編、「こども雑誌」が一編、初出誌不明童話が三編である。



「おとぎの世界」第1年第4号
1919年7月 文光堂



「黒煙」第1巻第3号
1919年5月 黒煙社

二、

童話「馬を殺した鳥」と「百姓と蛇」は、童話集『金の輪』の巻頭と巻末に置かれている。都に出たかもめは歓迎をうけるが、鳥の方は都でもやはり嫌われものであった。不公平な社会に恨みをいだいた鳥は、田舎に戻ると、相手をおだてたり、うそを言って困らせたりするようになる。その挙句、自由を欲していた馬の思いに火をつけ、殺してしまう。一方、「百姓と蛇」の仁作は正直者で信心深い百姓であったが、畑仕事中に蛇を傷つけたことで神経病になってしまう。その仁作の臆病を風刺した物語である。二作品は、たがいに照応している。不公平から生じた怨嗟の念や正直から生じた臆病の念といった内容は、これまでの童話では主題化されることが少なかった。ここから、度を過ぎしてはならないといった新たな教訓を読みとることもできるが、未明は、童話の世界にも人間の裏面に隠された真実を描き出そうとしたのであろう。

だが、『金の輪』はそうした人間の心の悪や弱さを描いた新奇な童話で童話集の前後をはさむかたちで、その内側に、さびしい子供や虐げられた人が異世界の力によって救われる童話を数多く蔵している。淋しく、あるいは苦しくて、何かの救いを待っている人（その多くは子供）のところへ、誰かがやってきて、何かを与えたり、その人の境遇を変えてやる話が多いのが『金の輪』の特徴である。「牛女」「お爺さんの家」「黒い塔」「小供の時分の話」「金の輪」「蠟燭と貝殻」「白い馬」「北海の白鳥」「薬売」には、主題を別にすれば、

この要素が多かれ少なかれ含まれている。

「牛女」では、病気で死んだ牛女が化けてでも子供を見守ろうと思ひ、ひとりになった子供のまえに姿をあらわす。「お爺さんの家」では、正雄の死んだ犬がさびしい正雄のもとへ帰ってくる。「黒い塔」では、身体障害ゆえに家族から疎まれる姫のもとに赤い船がやってきて彼女を連れ去る。「小供の時分の話」では、さびしく往来に立っていた太郎が、あめ売りのじいさんにさらわれる。「金の輪」では、病気で寝ていた太郎のもとに金の輪をまわす少年がやってきて、夕日のなかへ一緒に入っていく。「蠟燭と貝殻」では、海で遭難した父を待ち暮らす母娘のもとに黒い装束をした男が父親の遣いとしてやってくる。「白い馬」では、花売りに歩かされていた次郎のもとに、お婆さんがやってきて彼を白い馬に乗せて連れ去る。「北海の白鳥」では、世の無常を悟った王様のもとに魔法使いがやってきて王様をはまぐりに変身させる。「葉売」では、太郎の前に葉売りがあらわれ、葉売りにもらったもので憧れを与えられる。

一方、こうしたさびしさや何らかの欠如が補われる物語を、旅にでるといふ角度から捉えかえすと、この童話集の多くが移動によって構成されていることが理解される。奉公で田舎を出る話は「牛女」「月夜と少年」に、都を求めて旅に出る話は「馬を殺した鳥」「汽車の中の人々」に、どこか別の世界へ連れ出される話は「黒い塔」「金の輪」「白い馬」「北海の白鳥」「小供の時分の話」に、ある場所へあるものを探しに行く話は「めくら星」「お爺さんの家」に見られる。(右のうち、行って帰ってくる話は「馬を殺した鳥」「牛女」

「汽車の中の人々」「小供の時分の話」に見られるが、多くは、「黒い塔」「金の輪」「白い馬」「北海の白鳥」「めくら星」等、行って帰ってこない話に分類される。)

明治以降、中央集権が進み、地方から都会へと人々は移っていった。生まれた土地に住み続け、代々の職業を自己の生業とした時代から、職業を替え、立身出世を目指すようになっていく。しかし、明治末になるとそうした方向にも種々の限界や困難が生じてきて、大正期になると人々は、むしろ心のよりどころを求めようになっていく。田舎から都会へといった、いわば横への移動に限界が見えてきたことで、垂直の移動が志向された。もはや横への移動によっては救われない行き止まりの状態にある主人公達は、別の世界へ連れ行かれることで救われるのである。

三、

『金の輪』では、救いは別の世界からもたらされる。それは『赤い船』以来、未明がもった救いの方向性であった。現実世界とは異なる世界から救い手がやってきて、主人公を連れ去ることもあれば、そこから裁き手がやってきて人間を滅ぼすこともあった。ロマン主義者らしい異世界と現実世界の連続性のなかに未明童話の世界があった。未明は序文「童話の詩的価値」の中で次のように述べている。

子供程ロマンチストはありません。(中略)／ この子供の心

境を思想上の故郷とし、子供の信仰と裁断と、観念の上に人生の哲学を置いて書かれたものは私達の求める「童話」であります。／ 自由な世界―創造の世界―神秘の世界―これが即ち童話であります。／ 永遠に対する憧れと、はかない、しかし常に若やかな美と、この生活の慰藉とを、私は、自から童話の世界に於て求めるより他に途のないことを思ひます。／ さるにても、不思議なる一事は、空想の世界、連想、幻想の世界であります。

未明はさらに「私達が、何等かの幻想や、連想によつて、既に少年の時代に失はれた世界をもう一度取り返すことが出来たら、どんなに仕合せでありませう。而して、もし其れによつて、更に少年を楽しませることが出来たら、どんなに私達は、芸術の誇りを感じるであります。」と述べ、序文を結ぶ。この童話集が大人に向けて書かれ、また「直感が冴え」た子供に理解されるものとして書かれていたことが分かる。

ところで「金の輪」的な子供が異世界へ連れやられるモチーフは、『金の輪』刊行前年の長女晴代の死と関連づけて論じられることが多かった。しかし子供の死以前に書かれた『赤い船』所収の「森」（明43・8）には「金の輪」と近似したテーマが見られ、見知らぬ友達と一緒に異世界へ旅立つテーマは、未明童話の原点ともいえるモチーフであったことがわかる。

子供にとつて金の輪はそれを回して遊ぶ行為によつて、より子供を子供の本源的な世界へと向かわせ、大人にとつて金の輪は失われ

た童心をおのれの心に巻き戻す象徴的なきかけとなった。童話集『金の輪』は、前年に亡くなった長女晴代や長男哲文ら、子供であるがゆえに行き所なく、さびしく空想の世界に遊ぶしかない、弱くはかない存在へのレクイエムでもあるが、それは未明の子の死によつて運命的に描き出されることになったとはいえ、もともと未明の心のなかにあったものである。

しかし、この救いの方向は、やがて現実世界のなかでの救いへと大きく向きを変えていく。童話集『赤い蠟燭と人魚』や『小さな草と太陽』を見るかぎり、自然や故郷の中に、あるいは社会主義的な世界の中に、救いの拠り所を見いだしていくテーマとなっていく。未明の子供の死は、『金の輪』におけるロマン主義的世界を完成させるものになったと同時に、ロマン主義ではどうしても納得しきれない重い死を受け止め、現実の社会をどのようにかえていけば弱者が救われるのかといった問題へと未明童話の内実を大きく変えさせる大事な契機となった。

1 初出誌・紙が不明であった未明童話のうち、次の五作品は「読売新聞」に掲載されたものである。「蠟燭と貝殻」（大正8年6月7日、9〜10日）、「誰が一番悪いか」（大正8年6月21日、23〜24日）、「月夜と少年」（大正7年10月2〜3日）、「酒倉」（大正7年10月24〜25日）、「白い馬」（大正8年2月24〜26日）

